

学力分析

8月末に全国学力状況調査の結果が公表された。

学校設置者と共に各学校では、結果の分析による今後の対策をたて、今年度後半の指導体制に入っていることと思う。

新聞等でも結果の記事が多く、大きく掲載されていた。

やはり、「活用」つまりB問題に関する話題や課題が多かったと感じている。

しかし、私は、近年、気にしていることがある。

と、いうか、誰もが思っていることかもしれない。

では、それはいったい何か。

私は、「基本」A問題の結果が気になっている。特に中学校のA問題である。

中学校は、学習内容の広範囲化、抽象化、難化により、小学校に比べ学力差は大きくなる傾向がある。実際、今年度の小学校国語及び算数のA問題の σ （標準偏差）は2程度であるが、中学校国語のA問題の σ （標準偏差）は5、中学校数学はもっと大きな数値であった。

正答率は大変高く、良好と判断されているが、活用を行うために必要な基本が十分に身につけていない生徒の分布が相当広いということである。

近年、活用を重視するために、授業において既習内容を活用する授業が多く行われている。これはこれで大変いいことと思うが、その影で、基本が十分に身につけていない生徒が確実にそして相当数存在しているということである。

先日、文部科学省の教育課程担当官が、「近年、ペア学習や話し合いなど多様な学習形態に取り組む時間は増加しているが、ドリルなど定着のための時間が減っている」といつていた。

また、ある教員から「活用の問題はできるが、 $5 \div 9$ の計算ができない児童が存在する」という恐ろしいことを聞いた。

新学習指導要領では、未知の時代を生きる子供たちが必要とする資質・能力として、
知識・技能

思考力・判断力・表現力

学びに向かう力

をあげている。

やはり、学びの基本というか基礎（ここではあえて基本と基礎を使い分ける）である知識・技能が大切なのであり、創造、発想、開発、オリジナル、・・・これらの基盤は知識である。

何か、かつこよい授業は取組み、クイズみたいな問題には興味を持つが、実は何も身につけていない子供が存在しているのではないかと危惧している。

悪い言い方かもしれないが、学調の結果がもてはやされ、数字が話題になっている。しかし、単なる数字の変動を見るのではなく、この結果は何を言おうとしているのかを読み取らないといけない。

今こそ、分析法の分析を行う必要があるのかもしれない。

最後に、

先述の文部科学省担当官は、「やはり大切なのは知識です。」と行って話を締めくくったのが印象に残る。